

# リンゴ頼み 脱却模索

## ⑤ 王国の未来

リンゴだけに頼る「一本足の果樹栽培から、どう脱却を図るのか。最大産地の青森県では今、それが至上命令となりつつある。

### モモに転換

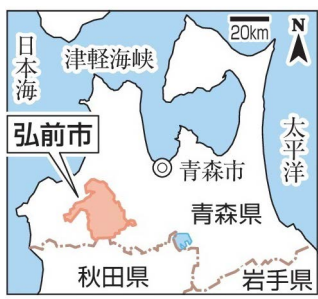
昨年8月下旬。弘前市の岩木山麓に広がるリンゴ畑の一角で、モモが収穫のピークを迎えていた。



青森県のモモ収穫期は8月下旬～9月末。生産量の

津軽農園がモモの作付けを始めたのは2005年。面積をリンゴ畑の15%前後まで広げ、今は主力品種「あかつき」「川中島」など4品種を3畝で栽培する。昨年は過去最多の約50トンを出荷した。

昨年8月下旬、収穫の最盛期を迎えた津軽農園のモモ。弘前市



傷が付かないよう慎重にもぎ取る作業を見守りながら、津軽農園の棟方健二社長(47)が話した。「気温が上昇するのは目に見えていた。リンゴの不作で収入が大きく変動する恐れがある。リスク分散が重要だ」

農林水産省によると、2019～21年で青森県のモモ栽培面積は6・2%増えた。津軽農園も3年後をめどにリンゴ畑の面積を減らし、モモ畑をさらに2畝増

多いリンゴの中生、晩生品種とほぼ重ならない。温暖化もあってか、糖度は作付け開始した当時と比べて1、2度上昇した。実も肥大傾向にある。

「津軽のモモはやす計画だ。消費者に浸透し



は少しずつ消費者に浸透し

異常高温は全国一の出荷量を誇るリンゴ栽培に影を落

ていくだろう」と棟方社長はみている。

弘前市では昨夏、最高気温が35度以上の猛暑日が観測史上最多の12日あった。

### 落果で廃棄

弘前市の農業法人みらいファーム・ラボは生産したリンゴ約90トのうち、落果などで1割が廃棄を余儀なくされ、生食用で出荷できたりんごが3、4割減った。傷があるりんごは加工用に回す他なく、価格は10分の1に下落する。

リンゴの代わりに栽培を考えているのは生食用のブドウ。リンゴの作業省力化

生食用に出荷できたものも完熟が進み、硬度も低くなったため、長期貯蔵に向かない実が続出。中心部が黒く変色する「蜜褐変」も目立った。法人の1戸小希

多収入を目指す高密植栽培で使う支柱は、ブドウ作りに転用が可能だ。「青森は『リンゴ王国』から『果樹王国』に転換を図る時が来ている」。1戸

農林水産省によると、全国の2022年産リンゴの収穫量は73万7100トン。うち青森県が43万9000トンと60%を占める。次いで長野県の13万2600トン(18%)、岩手県の4万7900トン(6%)と続く。青森県のモモの収穫量は全国8位で1570トン(1%)、ブドウは9位で3260トン(2%)にとどまる。



落果などで廃棄処分となったリンゴを見つめる一戸さん(左)ら  
昨年11月上旬、弘前市

伊藤教授は「リンゴを作れなくなるわけではないが、果実の硬さはかなり失われるだろう」と指摘する。「果樹栽培の基本は適地適作だ。モモやブドウへの転換も視野に入れる必要が出てきた」

(青森総局・伊藤卓哉)

※この画像は、当該ページに限りて“河北新報社”の記事利用を許諾したものです。転載ならびにページへのリンクは固くお断りします。